

男性は男性について何を語るか？

ジャーナリスト、経済学者

Jens Orback

男性の会議が、ストックホルムのナッカで開催された。私が男性の会議に参加したのは、これがはじめてではなかった。私が在職中に参加した大部分の会議は男性によって占められていた。男、男、男によって。しかし、男性についての討議がなされる会議に参加したのはこれがはじめてであった。これが、なぜ私が時々少々の不安と混乱あるいは落ち込んだ気分を感じるかという理由である。男性について語る会議は確かに私を落ち込ませる。ここでは、私は男らしさの基準であり、そしてまた白人の基準でもあった。ヨーロッパの白人男性は白人としてか、あるいは男性として自分自身を認識する。それをもって彼は普遍的とされる。ところが、この会議では、突然、彼は特殊な一つの性を持つ者として見られる。女性たちは、個人としてより、まず彼女らの性によってその存在を認識され、そして、彼女らの性のために排除されてきた。考えれば、男である私もまた性を理由に排除されるような時代に向かっている。いや、世の中はそんなに不公平であるはずはない。いずれにしろ、男性にとっては不公平はない。そうだとするなら、男性に平等を擁護する洞察力と強さを育てよう！

混乱の理由は他にもある。私たちはこの問題については初心者であり、事実そのように見られるだろう。特に私は自分自身の中にこの点に関する未熟さを見い出す。平等擁護のための言葉は不足している。

この会議では、平凡な考えが強調されている。とりわけ、フェミニストの研究と議論と比較する時、その違いは顕著である。しかし、私たちにもう少し時間を下さい。もしあなたが自分自身を男らしさの基準として見てきたとすれば、あなたは男としての特性を問う何らかの理由をもっていたのか、あるいは、もっていなかったのか。少なくとも、男性の会議は私たち自身、つまり男である私たちについての論争と試行を続けるいくつかの方法を示してくれた。

この必要性は、特にこの会議に飾られた子どもたちの描いた物すべてに表現されていた。北欧の子どもたちは良い父親とはどんなものか、男性はどのようにあるべきかについて絵を描いたり作文を書いたりしなければならなかった。この作品のリストはたくさんあった。

たとえば、「彼は深い川から私を引き上げなくてははいけない」「彼はプレゼントをくれるべきだ」「彼はお母さんと別れてはいけない」「彼はいたずらを計画したり、子どもを抱きしめたりする時間をもつべきだ」「彼はすばらしいゴールキーパーでなくてははいけない」などである。その中に、他のものよりも私により強い印象を与えた一つの願いがあった。それは、8歳のエミリーによって書かれた短く甘美なものである。すなわち、「パパは死んではいけない」。

エミリーがこのような望みを持つ正当な理由がある。心理学者で、文化人類学者でもある Aspor Ragnarsson は、北欧諸国の男性についての統計学的事実を説明している。男性に与えられる褒美はまさに生命そのものなのだ。私たちは、一瞬この世に生き、離婚をし、飲みすぎ、打ったりあばれたりし、子どもたちとのふれあいを失い、監獄に投げ込まれる…。

同時に並行して開かれた、非常に多くのセミナーを含むこの会議を十分に反省することは難しい。私はそれらセミナーの多くに忙しく出たり入ったりした。そのために、それらを全体的に把握することができなくなった。だから、このような感想は全く主観的である。自分の印象を構造化する私のやり方は、異なった脈絡の中にそれを位置づけることができるように、異なった角度からその会議を見ることである。たとえば、背後から我々の祖先の目でもって見る場合とか、私の聞いたことを他に誰も聞かなかったような側面から見る、また、私自身とさらに進んで未来のための闘いという観点からみる場合のように。

私たちの祖先の目で見ると

男性は、平等のために闘ってきた役割モデルの欠如に悩まされる。たぶん何人かはいたが、彼等は実際の闘いの場面で平等を擁護した人々の中心には現れなかった。しかし、彼等はそこにいる。私たちの共通の闘いの場面に、そして個人的な闘いの場面に。1995年4月27～28日にナッカで開かれた男性の会議について、彼等はどんなふうに語るだろうか？

彼の最高の理想であった人道主義と公正さをもって行動した人であるマハトマ・ガンジーは、私たちの男性会議にふさわしいと私が信じるあることを言っている。彼は、「知識はボールのようであり、サイズが大きくなればなるほど、ますます未知の事柄に接触するようになる」と言った。これはまさに、私たちが私たち自身を点検する時に、そのように感じるもの、またそのような気がするものである。

私にとって、祖父は「真」の男性であった。12人の子どもたちの父親、農夫、詩人、小学校の先生であるという外面的な肩書きにおいてだけではなく、彼の妻や子どもそして彼

が耕した大地に対する愛という点においても。彼は私たちの会議についてどんなふうに言っただろう。そう、私は彼がしばしば言っていた「言葉は少なく、行動は大きく」と言うのを聞く。その会議が組織され、500人以上の参加者によって行われたという事実は、単純に、ここに新しい方法を発見したいという意志、変化への喜びがあるということを示している。

私が「聞いたこと」を誰も聞いていない

ベンチでまた、休憩中や夕方になされた自由な話し合いが、最も価値あるものであったという事実は、参加者の多くが賛成することであろう。ステージの上で質問をするある機会が設けられたとき、私は最初の日に関の後ろの列で交わされた次のような会話を聞いた。

「なんて、こんなに長い時間、彼は何か平凡なことを言い始めたのかしら、それが、ほんとうに彼が言わなければならなかったことのすべてなの？」

「ええ、残念だけど私たちははまだ、男性の同僚を見くびることはできないと思っているわ」

「彼等は知性を欠いているだけではなく、かなり遅れてまさに今闘争中なのよ」
これはとても啓発的な会話だと私は思った。出発点が異なるという点についての話、つまり、私たちはどのように寛容になり、多様な動機に基づいた多様な方策を発見するかということなのだ。

前平等問題担当大臣 Bengt Westerberg のテーブルでの昼食後の会話は、これらのアイスホッケー世界チャンピオンたちはなぜ他の人たちとは違っていたかという分析にまで拡大されたとき、この平等会議の趣旨とは、かけはなれたものになった。同じテーブルにいたある女性が、その議論の時になって男たちが、突然こんなにも精力的で白熱した会話を交わしたという事実に刺激されたのである。さらに、彼女は一人取り残されたと感じたが、その議論はまだ続いていた。もし、彼女がスウェーデンと U.S.A.の試合を見るために家に帰り着こうとして午後3時半には帰ってしまった男たちのことを聞いたなら、どんなふうに言うだろうか。私は、彼女がストレートに自分の気持ちを言わず、男性の会議に行くのと同様にスポーツに関心を持つことも良いことだと考えてほしいと思う。

未来のための闘い

男性社会が今日擁護するものに対して、男性たちは罪を感じなければならないのかどうかと言う一つの質問が、会議中に数回にわたって起こった。私たちが到達した答えは、会

議の出発点で設定されたものに十分に一致するものであった。

北欧の男性たちは多面性をもった存在であるが、共通にもっている一つの点は、彼等全員が男女平等をのぞむという特徴をもつ社会で生活しているということである。今まで、平等に対する活動は主に女性のプロジェクトであった。しかし、私たちがいまだ平等社会を形成しえていないのは、すべて男性の責任であるということではなく、平等を現実化するためには、それにむけての努力が男女両性の共同事業として要求されるということなのである。すべての一人ひとりの女性に加えて、すべての一人ひとりの男性は広くゆきわたっている不平等を一掃するように努力し、それが個々のケースにおいて少女、少年、女性、男性たちにとって不公平であるかどうかをあきらかにする責任がある。

自分自身のことで言えば、私は罪の意識によってかりたてられているわけでも、利他的な社会連帯によってかりたてられているわけでもない。私はより良い世界についての夢と信念によってかりたてられている。そして、その方法は平等と呼ばれる。私は自分の関心によってかりたてられていることを恥ずかしいとは思わない。私と私の子どもたちのために、特に私の娘のために。私にとって平等は到達目標ではない。それは、地域、職場、家庭、また政治をより良くするための手段である。私はこれまで職場を数回変えたので、いわゆる男性の牙城といわれるいくつかの職場にまわったこともあった。軍隊、大学、行政府、報道機関など。すべて、これらの部署はそれぞれ、両性の配置さえも異なっているように見られた。それらはより創造的で、より効果的で、より興味深いものであった。商業と工業の分野での平等もまた、利益に変換されることができ、そして、自動的により高度の交易が行われるというようなことが、まもなく現実のものとなる。

- ・ IBM は女性も含めた多くの社員に依拠しなかったなら、長期間創造性を失っていたままだっただろう。IBM は、平等を利益に変換することを実現したとき、新しい事態が起こり始めた。
- ・ 女性たちがスウェーデン議会に彼女等自身の政党を持つと、圧力をかけ、投票用紙に書かれたリストにそれを含めることを要求したとき、新しい事態が始まった。
- ・ 株主総会で株主が経営者側に男女別ではない男女混合の明細書を要求するとき、新しい事態が生じるだろう。
- ・ 消費者が一方の性だけで運営されている会社の商品を買いたくないというとき、新しい事態が起こり始めるだろう。
- ・ 私たちはもはや一方の性だけで運営された会社や銀行に保険や貯金を預けたくないと考えるとき、そのような運営のされ方は長くは続きはしないだろう。

しかし、その道程はたやすいものではない。神が男性であるところでは男性が神である。

私と同じような多くの人々にとって、男性社会の理念と闘うことが基本的に問題なのである。私たちがそれと共に育ってきたイメージとの闘い。善悪のイメージ、行動パターンや期待のイメージ。時々、私の胃をむかつかせるイメージ。私が父とは違ったやり方をしようとする時、また、家庭ではなく、職場で、私たちは女性に取って代わられるということをはじめて理解するとき、このイメージは私をほとんど病気のような状態にさえする。家庭では、私たちはもはや不在者でも、行方不明者かあるいは待ちこがれられる何者かでもない。現実存在している者である。

新しいイメージが、新しい理念についての希望や信念によって型どられ、形成されるであろう時がもうやってくるだろう。男性にとって、部分的に新しい男性像を求めることはかえって混乱させられることになりかねない。結論として、私は再度、マハトマ・ガンジーを引用したい。「人々が何かのために働くとき、そこには彼等が抵抗できない正義があるのだ」

(橋本紀子)